

## 悲劇としての安政五年政変

三谷 博

プロローグ

皆様、お忙しい中、当劇場にお越し下さいますこととありがとうございます。どうぞ、ごゆるりと本日のお芝居をお楽しみ下さいますよう。

さて、今日、お目にかけますのは、今を去ること百数十年前の日本に起きた政治悲劇でございます。安政五年の政変。明治維新の動乱の出発点になった事件ですが、これをきっかけに二百数十年に及ぶ泰平という人類史上の世界記録が突如中断され、約十年に及ぶ政治動乱の末、新たな政府の下に日本人が別世界に船出することになった、そのきっかけを作った政変でございます。

「安政五年の政変」。耳慣れない言葉だと思いかも知れません。多分、「安政の大獄」なら知っているが、なんで別の物語をわざ

わざ演ずるのだとお思いのことでしょうか。でも、実は、大獄はその前の年に起きたこの大政変の余波の一つなのです。ご存じ長州の吉田松陰を始め、いわゆる志士たちが幕府に処刑されました。それが、彼の友人木戸孝允や、門下生の久坂玄瑞、高杉晋作、あるいは伊藤博文が発憤し、尊王攘夷運動に乗出すきっかけとなったのは確かです。しかし、それはこの一部に過ぎません。

この政変の最中には「天下の公論」という言葉が登場しました。將軍の後継として、英明をもってなる一橋慶喜を仰ぎたい、これが徳川親藩の越前松平家や外様の島津家を始め、天下の有志の望むところである、ぜひこの意見をくみ取っていただきたい。ペリー来航以来、西洋諸国の渡来に日本の危機を感じ、日本を守るため何らかの貢献をしたいと志すようになっていた大名とその家臣、そして民間の知識人は、江戸時代を通じてタブーとされてきた公の場での政治的発言をあえて始めたのです。

その結果は、当面は惨憺たるものとなりました。将軍の後継者はごく若い紀州の殿様になり、一橋を推した大名たちは強制的に隠居させられ、自邸に閉込められました。その腹心は身代りとして殺され、関係した人々も厳しい処罰を受けました。さらに深刻なことに、幕府と京都の朝廷も厳しい対立に陥りました。日本政界のトップ同士が争いを始め、たった半年の間に、二百年以上も平和を楽しんできた日本は、上は天皇と将軍の対立、下は民間の知識人の弾圧や抗議運動によって、政治動乱のただなかに陥ったのです。いわゆる明治維新は、この安政五年の政変から始まりました。いましばしば語られる尊王攘夷の志士の苦難は、この大きな凶柄の中の一部に過ぎません。

この「安政五年の政変」は、一体、どうして起きたのでしょうか。政変の前、政界の人々は、いずれ徳川幕府の崩壊をもたらすこんな政変が起きようとはまったく予想していませんでした。井伊大老は朝廷とできるだけ協調しようとしていましたし、朝廷側でも幕府との対立を巻き起そうと考えていた人はごく僅かでした。世の秩序をひっくり返そうと願った人は、久留米の神官真木和泉や長州の僧侶月性らほんの僅かしかおらず、彼等は当時の政界では全くのアウトサイダーに過ぎませんでした。

にもかかわらず、安政五年に日本の政界には深く厳しい、二度

と修復が出来ないような断裂が生じ、その悪循環は隣く間に広がり、深まってゆきました。

なぜ、こんな激変が生じたのでしょうか。皆様、これからのお芝居をじっくりご覧下さり、色々とお考えをめぐらせて下さい。当事者の身になってみれば、死刑になった人々は無論のこと、関係者すべてにとって辛い深刻な出来事だったに違いありませんが、後世の私たちにとっては、いろいろな教訓が読み取れ、その意味ですこぶる興味深い事件ではないかと存じます。それでは、ごゆるりとお楽しみ下さいますよう。

## 一、「悲劇」の形

歴史的な事件を悲劇として解釈することは適切なことだろうか。フィクションとしての物語の一種をブリズムに、現実を理解して良いものだろうか。

現実には複雑である。とくに、大きな事件は、眼をこらすと様々な要素や筋が浮び上がり、ときには、それらの絡み合いがあまりにも偶然に左右されているため、解釈を放棄する方がむしろ適切な対処だと言いたくなることすらある。古代ギリシアのペロポネソス戦争や第一次世界大戦の原因などがその例であろう。<sup>1</sup>しかし

ながら、われわれ人間は、社会に起きる大小様々の事件を物語として解釈する癖がある。「昔々、あるところに、誰それがいました。その人々はある時、こんなことを企てました。すると、誰々と誰々の間にこんな関係が生じ、その結果、彼等同士、そして彼等の住む社会はこんな風になりました」。厳密に因果関係をたどると、こうした物語は現実を大幅に簡略化したものであることが判明し、場合によっては、フィクションに近づいてしまうかも知れない。しかし、我々人間は、少なくとも人間の行為に目を注ぐ限り、そうした理解の形式を免れることはできないのである。<sup>2)</sup>

物語というナラティブを受入れるとして、次にどんな物語なのかという問題が出てくる。これには幾種類もあって、それらは重なり合い、流動的で、分類は無意味かも知れない。しかしながら、「悲劇」は、とりわけ人気のある物語の叙述形式で、しかも比較的鮮明な輪郭を持つ。娯楽用の物語の造型にしばしば用いられるだけでなく、現実の理解にも暗黙裏に援用されることが少なくない。それをここでは意識的に試してみようというのである。

その核は「不幸な結末」である。当事者は無論のこと、それを眺める第三者にとつても痛ましい結果が生じた場合、これが「悲劇」と認識される。当事者の間に激しい対立が発生し、それが仲違いだけでなく、一方もしくは双方に破滅、とくに死をもたらす。

それは、第三者の眼も引きつける。不幸な、同情すべきこととして、あるいは回避すべき教訓として、当事者以外の人々も強い関心を注ぐのである。

もつともポピュラーな悲劇の一つにシェイクスピアの『ロメオとジュリエット』がある。<sup>3)</sup> 演劇だけでなく、オペラやバレエ、映画、そしてミュージカル『ウエストサイド物語』にも翻案されて、親しまれてきた。よく知られているように、互いに争う二つの家に生れた男女がパーティで出会い、禁断の恋に陥る。善意の修道士が二人を結婚させるが、ロメオはふとしたきっかけで、ジュリエットの従兄弟を殺し、町を追放される。また、ジュリエットは父から別な男性との結婚を命じられる。修道士は二人を添い遂げさせようとジュリエットに仮死の薬を与え、葬儀を済ませた後、町を抜けさせようと図ったが、秘かに立返ったロメオは彼女が実際に死んだと思ひ込んで自殺し、目覚めたジュリエットはその後を追う。この悲劇に直面した両家は終に和解するという筋書である。

若い男女の恋を家族・共同体が引裂く。その克服のために第三者が善意の工夫を凝らす、手違いにより最悪の結果が生ずる。物語の核にいる人々には愛と善意の求心力が働いているが、環境はこれに敵対的で、偶然がそれに味方する。その結果、本人たち

に破局が訪れるが、その犠牲の上に社会に和解と秩序が訪れる。そういう構造である。

これに対し、同じシエイクスピアの『オセロ』は、悪意の隠謀が見事に成就するという筋書である。主人公は恨みに駆られた部下の暗示にかかり、愛する妻の不貞を疑い始め、嫉妬の虜になって、終に我が手にかける。巧妙な暗示を受けた主人公の狂気への転落が見所である。

これは、偶然が支配する『ロメオとジュリエット』と対照的に、権力欲と愛が絡み合う場において、個人の悪意が完璧に成就するという物語である。これを歴史に援用するといわゆる陰謀史観となる。人は、普段は無意識に行動しているが、大事なことは目的として意識し、その手段や段取りを念入りに考える。かつ、政治の世界は権力をめぐる競争が基本だから、ライヴァルを出し抜くために手段を選ばないこともしばしば起きる。そのため、この解釈法は根強い人気がある。しかしながら、他方では、人はことが思い通りに運ばず、挫折した経験も豊富にもっている。段取りの行違いや誤解によって失敗が起きることもよく知っている。したがって、現実に近い政治劇では、隠謀と偶然と両方が混合して描かれることが多い。

同じくシエイクスピアで言えば、『ジュリアス・シーザー』が

そうである。これは政治劇だから、主人公たちの間に愛という引力は働かず、勢力競争が場を支配する。同じ党派の間では友愛が語られるが、競争相手との間には敵意と猜疑があるのみである。主人公はマーカス・ブルータス。彼は、シーザーに王位に就こうとする野望を見てとり、共和制の伝統を守るため友人とともに暗殺を企て、実現する。これに対し、政敵はシーザーの葬儀に現れて故人の徳を称え、シーザーが遺産すべてを市民に分配しようとしたという虚偽の遺言をでっち上げて民衆の支持を勝取り、ブルータスを追放に追込む。その後、ローマは真つ二つに分れて内乱に陥るが、決戦の時、疲れ果てていたブルータスは誤報によって敗色濃厚と信じ込み、自決をする。

前半では隠謀とそれに対する巧妙な巻返し工作、後半では誤報による自滅が語られるのである。

では、現実に見えてきた事件をこれらの悲劇を念頭に解釈したら、どのように見えてくるだろうか。維新の政治的動乱の発端をなした安政五年政変について試してみよう。

## 三、安政五年政変

## 序幕

## 第一場 時代背景と主人公たち

安政五（一八五八）年。米使ペリーが到来して日本の国際環境が一変してから既に六年が経っていた。この間、幕府や有志の大名が海軍伝習をはじめ様々の技術的対応を始めたが、政界は一見平穏で、二百数十年余の泰平がまだ続くかのようにであった。

しかしながら、その裏面では、二つの重要問題が頭をもたげ始めていた。一つは、西洋諸国への開国に踏切るか否かの問題<sup>4</sup>。四年前に開港の条約を結んだとはいうものの、まだ国交と貿易は保留状態だった。幕府は前年に漸進的な開国方針を打出し、まずオランダ・ロシアと通商を取決めた後、冬にアメリカの代表タウンゼント・ハリスを江戸城に招いて、国交と貿易を取決めた修好通商条約の草案を決めた。しかしながら、この鎖国をきっぱりと捨て去るという決定は国内に受入れられるか否か、予測が付かなかった。そこで、幕府は諸大名に意見を諮問し、朝廷にも勅許を求めることとした。大名の答申のほとんどはこの政策転換を止む

なしとしたが、中には他ならぬ徳川三家の尾張と水戸の反対論が混じっていた。他方、幕府は対米条約の勅許を朝廷に奏請することにした。近世を通じて幕府は国政の問題について朝廷の意見を問うことはなかったが、世に挙国一致の姿を明示するためにこの異例の挙に出たものと思われる。当初、幕府は朝廷から強硬に拒絶されるとはまったく予想していなかった。

他方、これと併行して、將軍の養嗣子問題が持上がっていた。徳川家定は安政三年末に近衛家の養女として島津家出身の篤姫を正夫人に迎えていたが、実子に恵まれず、いずれ養嗣子を迎えねばならないはずだとの観測が政界に流布していた。彼自身は普通の知性の持主であったと伝えられるが、その政治指導への態度は消極に傾きがちであった。そのため、日本が直面する未曾有の危機を凌ぐにはもの足りず、はやく有能な人物を養嗣子に迎え、彼に指導を託すべきだと考える人が出現した。その中心にあったのは三家に続く家格を持つ徳川一門、越前の松平慶永であった<sup>5</sup>。彼はずでに家定の將軍継統の当時から一橋慶喜（水戸徳川斉昭の七男）を適任と考え、安政三年秋には、親友の島津斉彬（鹿児島）と伊達宗城（宇和島）、および徳川慶勝（名古屋）・蜂須賀斉裕（徳島、先々代家斉の息）らに相談を持ちかけている。ペリー来航の前後に幕閣を主宰してきた阿部正弘はこの動きを抑えていたが、

阿部の病死後、慶永は公然たる運動を開始し、自邸に勉強会の口実を設けて有志の大名を集める一方、幕閣にも養嗣子に「年長・賢明」の人を建てるように申込み、さらに旗本の有力者にも働きかけた。

將軍家に直系の男子がない場合の継承法には決りがなかった。五代綱吉の後継は先代の子孫、七代家継の後継は初代の曾孫であった。家の論理で言えば徳川の姓を持つ五家が範圍内であったろう。一 尾張慶勝（安政五年に三五歳。水戸家の血筋。家定と同年）。二 紀伊慶福（二三歳。家定の従弟）。三 水戸慶篤（二七歳。慶喜の長兄）。四 田安慶頼（三〇歳。家斉の甥。松平慶永の同年齢の実弟）。五 一橋慶喜（二二歳）。

徳川の御三家と御三卿であるが、清水家は当時空家であった。松平慶永が田安家の当主であったなら当然候補の一人とされたはずであるが、越前家に入っていたためその資格がなくなっていた。彼が積極的に養嗣子問題に発言したのはそのためだったと思われる。

しかしながら、当時の慣習からすると、現將軍との血筋の遠近が重視された。そうすると、紀州慶福が自然な選択となる。逆に、いくら有能で聞え、年齢も次期指導者としてふさわしくとも、水戸出身の一橋慶喜は不適當と見なされたはずである。水戸家は二

代以降將軍家とは血の出入りがなかった。とくに、尾張家や紀伊家と異なると、水戸家は家斉の男子を養嗣子として迎えたことがなかった。徳川斉昭の襲封は、家斉の息子の入嗣を阻む形ではなかった。その記憶は関係者の脳裏に鮮明だったはずである。

## 第二場 江戸—一橋擁立派の大奥工作と老中の段取り決定

慶喜の入嗣は、その実父、強烈な人格と攘夷論と極端な節儉で知られる斉昭が將軍家の内部に入り込み、強い影響を行使するのではないかと、多くの幕府関係者から警戒されていた。そのため、一橋擁立グループは、表役人だけでなく、大奥を通じて將軍その人に働きかけようとした。国元にあった島津斉彬は西郷吉兵衛に特命を与えて上府させ、越前家の橋本左内と協力して、大奥の篤姫と連絡を取らせたとである。しかし、篤姫が家定の生母本寿院を通じてこの旨を披露してもらったところ、家定は以ての外と立腹し、まだ養子を探る年齢ではない、もし採るとしても慶喜は年が行過ぎ、とにかくいやだと語った。大奥を通じた工作は封じられたのである。

他方、老中筆頭の堀田正睦が勅許奏請のため京都に使うことが決った後、老中たちは將軍に御目通りを願ひ、この二つの問題の処理法について了解を得た。勅許を得た後に養嗣子問題に取

りかかるといふ段取り、および嗣子の決定は家定の英断に依るといふ決定である。京都に使用した堀田が在府老中に書送った手紙によると、老中たちは血縁の近い慶福を候補として考えていた。しかしながら、堀田は京都で一橋を適任と考えを改めるのである。<sup>9</sup>

## 第一幕 京都 対立の発生

第一場 越前・彦根の京都手入れと条約勅許の難航

堀田一行が京都に向った頃、様々の勢力が朝廷への政治的働きかけを始めた。島津斉彬は国元から累代の縁戚近衛家に書翰を送り、人望ある一橋を養君にするよう老中に申立てた事実を知らせた上で、朝廷から指名の内勅を出すように依頼した。かつ松平慶永は橋本左内を入京させて情報収集と政治工作に当らせた。<sup>10</sup>他方、譜代大名筆頭の井伊直弼は同じく腹心長井義言を京都に送って同様の探索に当らせている。<sup>11</sup>橋本は朝廷の実力者三条実万に面会したとき、開国の不可避を説いたが、はかばかしい反応はなかった。しかし、將軍の後継に言及したとき実万はこれを歓迎した。そのため以後は専ら一橋擁立を公家衆に説くことにした。

こうして朝廷に一橋待望論が俄に高まった。そのとき、井伊家の長井は背後に水戸の「隠謀」を見いだした。孝明天皇は条約の

勅許は許しがたいと確信し、その意を受けた関白九条尚忠は勅許を婉曲に断わるため、三家以下の諸大名に条約につき再諮問し、その結果を持って再上洛せよと伝えた。<sup>12</sup>堀田は巻返しを図り、関白から幕府一任との勅掟を取付けることに成功した。しかし、この決定に不満だった天皇は久我建通にその意を漏し、その意を受けて朝廷では公卿八八人の関白邸列参という前代未聞の騒動が発生した。その結果、勅掟は最初の趣旨に戻ったのである。

第二場 長井義言の「水戸隠謀」発見

条約勅許が難航していた間、京都では様々の怪文書が飛交った。その一つに「水戸内奏書」と名付けられた文書があった。<sup>13</sup>水戸徳川家の家臣が条約勅許を阻もうと公卿に差し出した上書であったが、長井義言はこれを徳川斉昭が朝廷に攘夷論を吹込もうとした文書と解し、勅許難航の元凶はこれだとみた。そして、同時に盛上がつた一橋待望論とこの文書が密接に関係している、つまり徳川斉昭が朝廷を息子の將軍嗣子擁立に利用しようとする図り、朝廷の攘夷論に迎合して勅許を妨害したと見なしたのである。<sup>14</sup>江戸の直弼側近に当って書送った「悪しく申さば隠謀の体」という理解は、瞬く間に井伊家や將軍側近を始め、紀州慶福の擁立を熱望していた人々の間に流布していった。

これは事実誤認であった。徳川斉昭は当時なお攘夷を主張していた。また、表面には現れないものの、越前家を通じて一橋擁立を図っていた。しかし、この両者の因果関係は長井の想定とは逆であった。堀田が京都に向った後、松平慶永は江戸城大奥に一橋の嗣立を受入れさせるため、斉昭に忠告して、親族の太閤鷹司政通に今は打払いの時ではないと明言した書翰を書送らせ、その写しを大奥に差出していたのである。<sup>15</sup> また、勅許獲得の責任者であった幕府有司は、「水戸内奏書」を斉昭のものではあり得ないと判断し、世上の噂を否定していた。<sup>16</sup>

なぜ、長井は誤解したのでろうか。堀田たちと異なつて、彼は熱烈に紀州擁立を願っていた。血統上当然のはずの選択が突如朝廷の介入で怪しくなり始めた。最初はこの驚愕がもたらしたのであろう。しかし、「水戸陰謀」という認識は直ちに政治的に必要に転化した。長井は元来は勅許拒否論だった九条閔白を閔東一任に翻意させるため、「水戸陰謀」論を使ったのである。<sup>17</sup> 斉昭の私的欲望を満足させてはならない。勅許の拒否も一橋の擁立も、朝廷と幕府の間だけでなく、徳川家の内部にも鋭い対立を生み、日本の秩序は頂上から壊れてしまう。斉昭の陰謀を排除し、条約について幕府の言い分を認めてほしい。それが説得の論拠であり、これは成功した。そうすると、彼と井伊直弼にとって、水戸陰謀論

は閔白を幕府側につなぎ止める政治的必要から、疑いえない「事実」となったのである。

## 第二幕 江戸 井伊大老の登場と妥協の試み

### 第一場 鶴の一声

老中堀田正睦は、大名再諮問の後、再上奏せよとの勅掟を携えて江戸に帰った。彼の胸には、京都の反対論を和らげるには、別の案件、將軍の養嗣子問題についてその意向に従つてはどうか、つまり一橋の採用を図り、その準備として大老を設け、松平慶永をこれに当てようとの心算があった。

ところが、將軍に京都の首尾を報告し、言がこの段に及んだとき、家定は、「それは不可、大老には、家柄と言ひ、人物と言ひ、井伊直弼をおいてその人はいない」と断言し、その席で直弼の大老任命が決つたのである。<sup>18</sup>

堀田は帰府する前、先に岩瀬忠震を帰して一橋擁立の下準備をさせた。その噂が表方に広まつた時、將軍側近や大奥を始め、紀州論の人々は巻返し工作に出た。御前会議の前日、奥向きと縁故の深い徒頭葉師寺元真が井伊邸を訪ね、涙ながらに直弼の出馬を訴え、將軍家の召命があつたら必ず受けるとの約束を得て帰つた。<sup>19</sup>

こうなったら御家にすがる外はないと説得したのである。將軍の鶴の一声はこうした裏面工作、一種の隠謀の結果であった。

## 第二場 大老と一橋擁立党の駆引き

大老は就任早々、二問題の処理について、明快な段取りを建てた。將軍継嗣については、早くも五月一日、將軍から慶福を採るとの上意を得ている。条約に関しては、朝廷の要求どおり、大名に再諮問し、五月中にほとんどの答申を得た。それらはほぼ幕府の意に沿う内容であった。ただ、一橋擁立グループが、「水戸隠謀」と同様、この問題を將軍継嗣問題に利用する懸念があった。そのため、大老は彼等から異論が出ないよう、越前の慶永を始めとして、努めて穏やかに説得している。慶永は一橋採用は「天下之公論」だと主張したが、大老は内定の事実に触れず、ただ耳を傾けるに留めた<sup>20</sup>。

かくて、情勢は日一日と大老に有利となった。条約については、しかるべき老中が大名の意見を携えて上洛する準備を始める一方、將軍継嗣に関しては六月一日の式日に継嗣が内定したと公表した。その上で朝廷に使を送り、慣例どおりめでたしとの宣言を取付けて、一八日に人名を公表するという段取りを建てたのである。この時、一橋党は少数になりかかっていた。幕府有司の中に広がっ

ていた支持者のうち、中心人物は左遷され、当初は京都に手を回して宣言降下を妨げようと考えた松平慶永や山内容堂も、宣言到着予定の一四日には、条約の答申を提出したのである。

## 第三幕 対立の爆発

### 第一場 ハリスの闖入と不時登城

しかしながら、ここに別の因果系列が介入し、それが対立の顕在化、さらに政変爆発の引金を引くことになった。慶福の名が公表される予定の前日、一七日に下田にいたハリスが突如神奈川沖に現れ、即時の条約調印を要求してきたのである。

ハリスは条約の文面を議定した後、調印を日本側の国内手続を終えてから行うことで合意し、その期限まで領事館のある下田に帰っていた。その後、七月二七日まで期限延長を受入れていたのであるが、たまたまアメリカ艦が下田に来訪し、第二次アヘン戦争に勝利した英仏が近く使節を寄越すとの知らせをもたらした。日本開国の一番手の榮譽を失わないため、かつ軍艦の威力が使える機会を生かそうと、期限より早く調印するよう幕府に強請しようと思いついたのである。

外国奉行の岩瀬・井上は元来、この条約は当然結ぶべきもので

あり、英仏使の来訪以前に雛型を取り決めておいた方が有利と考えて、幕閣に調印を要請した。大老はあくまで勅許後にすべしと主張したが、他の老中たちは外国奉行と同論で、結局一九日に至って、調印引き延しには努めるが万一の場合は止むなしと決定した。大老が自邸に帰った後、家臣は、勅許の手続を中断したら違勅の罪を得る、朝廷との関係悪化が必至だけでなく、まだ一橋擁立に拘っている「隠謀方」に絶好の口実を与えると諫めたが、大老はすでに將軍の決裁を得たから止むを得ないと述べている。<sup>21)</sup> おそらく、国政の最高責任者として、形式上の朝廷尊崇と政治上の必要とが矛盾する場合、後者を優先することを覚悟し、自らの政治的危機については捨身で当ること、即ち反対派の排除という中央突破策を考えたものと思われる。

岩瀬・井上は即日調印を行い、大老はその責任を負う立場に陥った。劣勢にあった一橋擁立党は、ここに一気に息を吹返した。慶福嗣立が知れ渡った頃、彼らは挽回策として井伊大老と老中松平忠固の不和に着目し、まず大老に忠固を免職させて自身を孤立させ、次いで大老を辞職に追込んで松平慶永を後任とし、その上で継嗣を一橋に差替えようと計画していた。<sup>22)</sup>

この第一段階は二三日に忠固が免職されて実現した。あたかもそれは条約調印の直後であったため、水戸家は第二段階にすぐ取

掛った。違勅調印を理由に井伊を排斥して慶永に政権を掌握させ、継嗣の公表も、謝罪の時に慶事は不可との理由により延期させようというのである。このような計略の下、二四日、徳川斉昭は、尾張の慶恕と越前の慶永を誘って不時登城し、井伊大老以下の老中に対面して、その責任を弾劾した。<sup>23)</sup>

しかし、大老はこれを申訳なしの一点張りて柳に風と受流し、斉昭らの將軍への対面も阻止した。斉昭の企ては完全に失敗したのである。その原因の一つは、前日、一橋慶喜が不時登城し、違勅調印の責任を追及したついでに慶福嗣立の公表を促したことにあった。これを受けて、直弼らは予め一橋党対策を決定していたのである。大老は不時登城した斉昭らと慶永を殿席の相違を理由に分断し、昼食時になっても食事を出さず、その後によりやく対面した。このため斉昭の英気は空振りに終わったのである。

## 第二場 一橋党の大量処罰（暴力行使の一）

こうして、一橋党大名の違勅調印抗議と井伊排斥の企ては完全に失敗した。しかし、大老側では、ことは済んでいない。斉昭らの不時登城は、かねて疑っていた「陰謀方」が遂に正体を現わし、正面から攻撃してきたことに他ならない。何等かの処罰が必須であった。

たまたま、この時、將軍家定が重態となった。慶福の嗣立は二五日に公表されていたものの、將軍の死を機に一橋党がさらなる「陰謀」を企てる懸念がある。そこで、大老は、家定の存命中、死の前日の七月五日、不時登城の關係者に対し処罰を下した。首謀者と見なされた徳川斉昭は隠居の身であったが、死刑より一等軽いだけの急度愼<sup>きつちつしみ</sup>。尾張慶勝と越前慶永は隠居の上、急度愼<sup>きつちつしみ</sup>。一橋慶喜と水戸の当主慶篤は一時登城停止<sup>23</sup>。一橋党の有力大名の山内豊信（土佐）は、当時在国ではあったものの、翌年に隠居・愼に処せられ、伊達宗城（宇和島）は「自発的」な隠居を迫られた<sup>25</sup>。鳥津斉彬はこのグループの中心人物で、その京都への働きかけはよく知られていたものの、鹿兒島で急死したため不問に付されている。旗本で加担した有司もまた退けられた。岩瀬忠震は、英仏露などとの修好通商条約が妥結した後、左遷ついで免職の上、隠居・差控に付されている。

こうして、江戸時代始つて以来、未曾有の大政変が勃発した。大名数人と旗本有司多数が同時に処罰されたのである。大老の側から見れば、「水戸隠謀」がいよいよ露見し、その悪の拡大を未然に摘取り、条約と継嗣の二難題に決着をつけたに過ぎなかつたであろう。しかし、これは事件の終りでなく、むしろ幕府の崩壊に至る政治的動乱の序幕に過ぎなかつた。調印された条約が

「不正」と見なされるようになっただけでない。この春にわかに政界に登場した朝廷と幕府の対立、また処罰された有志大名と幕府との抗争はなお拡大する。しかも、それは全国の、特に尊王攘夷を奉ずる知識人たちの政治関心を呼び醒し、この紛争の渦中に身を投ずるように誘つたのである。

#### 第四幕 対立のエスカレーション

##### 第一場 江戸 一橋党の謹慎と急進化

運動の失敗は当事者を屈従・後退する者と急進化する者に分ける。大老に処罰された尾・水・越の大名やその近臣は、憤りを抑えて謹慎を続けた。徳川家門の柱石と自認する彼等は、いかに不服であろうとも、宗家に敵対し、紛争を拡大する意志はなかつたのである。しかし、運動に関与した末端の家臣たちは、一橋嗣立の失敗と主君の恥辱に憤慨して、逆に急進化した。「違勅調印」という幕府の失策を捉え、朝廷を利用して状況を一気に転換しようと同ったのである。水戸・薩摩の一部家臣は、日下部伊三次（水戸縁故の薩摩家臣）を京都に派遣し、朝廷から大老の上京を命じて退陣に迫らむか、三藩主赦免の勅掟を下すかして、慶喜と斉昭の政權掌握に活路を開こうとした<sup>26</sup>。

## 第二場 京都の朝廷

これより先、条約調印を報せる老中奉書を受取った天皇は、直ちに御前会議を開き、讓位の意志を表明した。勅許再奏請の使者の上京を待っていたところ、調印済という一片の書付けを受取ったのは信じがたい恥辱であった。廷臣は、天皇の辞意を「三家大老の中上京すべし」という勅を下すことで撤回させたが、幕府はこれを拒んだ。三家は処罰したばかりであり、將軍が死去したため取込み中である、代りに老中を上京させ釈明するというのである。これを聞いた天皇は再び讓位を主張し、かつ幕府に違勅調印を詰問する勅書を送ることを提案した。<sup>27)</sup>

そこで、左大臣近衛忠熙以下の廷臣たちは、天皇の辞意を撤回させるため、日下部の入説を参考として、八月七日、次の勅掟を幕府と水戸家に下し、水戸家からさらに三家以下の徳川家門に回付させることにした(国持大名にも、それぞれ縁故の公家から写しを与えたため、「戊午の密勅」と呼ばれる)。第一には、勅許なき調印は不審である。第二には、尾・水・越の処罰は人心の動向にかかり遺憾である。第三には、善後措置として、大老・三家以下、全大名の「群議」の上、「国内治平」「公武御合体」「永久安全」の策を立つべし、というものであった。<sup>28)</sup> この勅掟は、継嗣問題には直接言及せず、婉曲な言葉を使っているが、尾・水・

越を復権させた上で、条約を破棄するよう求めたものにほかならない。朝廷が公議を求めたことも注目に値する。

無勅許調印は弁明の余地なき失策であったから、天皇と廷臣の態度は強硬であった。朝廷の決定は元来関白の手を経ないでは行えない伝統であったが、天皇の委託を受けた左大臣近衛忠熙以下の首脳は関白ぬきでことを進め、しかも幕府の頭越しに水戸へ直接勅掟を下すという前例のない大胆な策も講じた。朝廷の中には、岩倉具視のように処分中の水戸への降勅を挑発的に過ぎると反対する者もあったが、案の定、大老は、水戸家がなお「陰謀」を止めぬことに激怒し、水戸降勅に関係した家臣、浪人、朝廷関係者を一網打尽にすることを考え始めるのである。<sup>29)</sup>

## 第三場 京都での弾圧(暴力行使の二)

九月三日、新所司代の酒井忠義が入京し、一七日には特使の老中間部詮勝も到着した。彼等の使命は条約につき朝廷の事後承諾を求め、かつ家茂への將軍宣下を獲得することであった。長野義言は、旅宿に向いて「陰謀方」の志士の逮捕を進言したが、入京前の所司代は当初は穏和な態度で交渉する方針をとっていた。

しかし、九月二日に交渉相手となると、所司代らは弾圧政策に転

じた。七日に王室書生梅田雲浜を逮捕し、間部入京の翌日には水戸藩京都留守居の鶴飼吉左衛門・幸吉父子、さらに二二日には鷹司家の公家侍小林良輔らを捕えたのである。

間部は、このような弾圧政策の効果を見届けた上で、一〇月六日に閣白の辞表却下を奏上し、これが認められた後、初めて参内し、さらに二四日には將軍宣下を獲得した。そして、この日から繰返し条約調印の事情を説明し、勅許を求めたのである。その際の説明にはやはり水戸陰謀論が使われている。<sup>(20)</sup>

これに対し、天皇は粘り強く抵抗し、和親条約への引戻しを求め、かつ兵庫の開港と夷人の開港地雑居には強く反対した。しかし、一二月に入って宮家や堂上の家臣を幕府が捕えて江戸に送り始めると、天皇は譲歩を余儀なくされた。大晦日に至って、条約調印の止むなき事情を諒解し、兵庫等に関して留保を付けた上で和親条約への引戻しを猶予するとの勅掟を与えたのである。<sup>(21)</sup>これは事実上の勅許に他ならないが、大老は公表しなかった。西洋諸国に内状を知られたくなかったのであろうか。

間部はこうして、条約につき一応の諒解を朝廷から獲得した。ただし、京都を去る前に、幕府側の唯一の支えであった九条閣白の地位を確保するため、閣白を通じて反対派の宮と堂上に圧力をかけ、自発的な願いの形を取って政界外に追放した。天皇の抵抗

を押し、青蓮院宮を慎み、鷹司政通・輔熙父子、近衛忠熙、三条実方を辞官・落飾などに処し、その他の公卿も一〇人余を処分したのである。以後、朝廷は幕府の威力の下に鳴りをひそめることになった。

## 第五幕 江戸 反対派の断獄（暴力行使の三）

京都で政治弾圧が始った頃、江戸では「水府陰謀」に関わった逮捕者を裁くため、老中松平乗全の下に五手掛が組織された（二月二日）。しかし、この中には寺社奉行板倉勝静（備中松山）、勘定奉行佐々木顕発、評定所留役木村敬蔵ら寛典論を唱える者があつたため、大老はかれらを罷免し、腹臣に入れ換えた。<sup>(22)</sup>その結果、八月二七日に、まず主犯とみた水戸家関係者に最終処分が下された。斉昭が永蟄居、慶喜が隠居・慎、水戸家の家老安島帯刀が切腹、同奥右筆頭取茅根伊予之介・京都留守居鶴飼吉左衛門が死罪、同幸吉が獄門である。また、岩瀬忠震・永井尚志・川路聖謨ら一橋党に与した幕府有司も免職・隠居・差控の処分を受けた。遅れて、有力大名の家臣や牢人も処刑された。一〇月七日に越前の橋本左内や王室書生頼三樹三郎が死罪となり、二七日には長州の吉田松陰も処刑されたのである。総じて極刑八人、遠

鳥や追放等を入れると重刑に処せられたものは約四〇人の上った。日下部伊三次や梅田雲浜など収監中に病死したり、自殺した者も一〇人ほどいた。近世未曾有の大獄である。この間、老中太田資始や問部詮勝らも量刑が過酷に過ぎると寛典を唱えたが、免職や慎を命じられている。

大老は反対すると見た人物をすべて強制的に却け、安政五年にわかに政界に登場した朝廷・大名・浪人の国政介入を断つことよって、幕閣専制への復古を図った。この恐怖政治は、政界の動揺を凍結はしたが、裏面には大きな違和感と怨恨を蓄積することになった。本来はこの政変には無関係だった吉田松陰がたまたま処刑され、桂小五郎や久坂玄瑞・高杉晋作らが幕府に深い敵意を抱くようになったのはよく知られる通りである。越前藩の場合、親藩ゆえに恭順を通したが、松平慶永は幽閉中、橋本左内への哀惜を胸に「公議」追求の意志をいよいよ固めることになった。そして、政変の台風の目、水戸は、斉昭ら首脳は謹慎を続けたものの、家臣の一部は逆に、幕府の誤りを正し、主君の屈辱を晴らすうと、一層急進化したのである。

## 第六幕 幕政匡正の運動 諸藩連携から大老暗殺へ

### (暴力行使の四)

#### 第一場 水戸、除奸義拳と勅掟返納問題

水戸に幕府詰責の勅掟が下ると、水戸の急進派は薩摩の家臣と提携して、勢力挽回を企てた。彼等は、勅掟の写しを受け取り、幕府の外交と大名処分に批判的になっているはずの西国大名を糾合して庄政に対抗しようと考え、諸家臣への働きかけを試みた。斉昭らへの最終処分が未定の間は慎重に行動したが、厳罰が明らかとなると、その一部は有馬新七ら薩摩家臣の一部が提唱していた「挙兵討奸」計画に踏込んだ。尊攘派のうち、高橋多一郎や関鉄之介はそれを命ずる勅を諸藩に下してもらうため上京している。しかし、警戒嚴重のため、彼等は幽閉中の宮や公家には接近できず、江戸に帰府した後、国元に召還されて計画は中断された。

幕府は安政六年に処罰が結了すると、水戸から幕府批判の勅掟を返納させ、ことを振出しに戻そうと図った。一二月に朝廷から返納を命ずる勅を得、水戸家に厳しく要求したのである。

これに対して、水戸では大論争が持ち上った。当時政権を担当していた門閥派は徳川家一体論に立ち、紛争拡大を防ぐために返納に応じようとしたが、尊攘派の「天狗党」中にもこれに同調す

る者があった。『新論』の著者会沢正志斎もその一人で、「鎮派」と呼ばれた。しかし、高橋ら「激派」は返納にあくまで反対した。勅掟は水戸家の正当性の象徴で、斉昭らの処分撤回の根拠でもあったから、これが失われると永遠に頹勢挽回は出来なくなると考えたのである。水戸では論争の末、一応妥協案が成立し、勅掟は幕府を経由せず、朝廷に直接返されることとなった。

しかし激派は返納反対に固執した。返納を実力で阻止するため、数百人が水戸街道の長岡に集合して氣勢を挙げた。幕府から返納運送を「違勅」として責められ、足元からは激派に突上げられた藩当局は、二月一五日に至って、遂に慎中の斉昭に頼ることにした。激派の仰ぐ斉昭から直接に「論書」を下して、君命を用いぬ者は処罰すると示唆し、それでもきかぬとみると、リーダーの高橋多一郎らを禁錮しようとしたのである。長岡勢はこれにより解散した。しかし、高橋らは次々に脱走し、大老暗殺に突進んでいったのである。

## 第二場 江戸・外桜田門

勅掟返納の決定は、水・薩の家臣が企てた諸藩連合の、拳兵討奸の計画を、少数によるテロルに縮小した。彼等は元来、水戸家臣が大老の襲撃と横浜商館の焼打ちを行い、同時に薩摩藩が兵

三〇〇人を上京させて、勅掟により「公辺の御政事正道に御復し」「尊王攘夷」を実行するといふ計画を立てていたが、薩摩藩の呼応を確認する前にことを決行したのである。

これより先、薩摩家臣の一部は、同志四〇人余が脱走する盟を結んでいた。しかし、九月に国政に復帰していた島津斉興が死去し、久光が実権を握ると、彼等は「突出」よりも藩全体を動かす方へ重点を移した。「突出」間際に主君忠義より直書を下されたのがきっかけである。彼等「誠忠」組の内部では、有馬新七のようにあくまで突出を主張する者もあったが、大久保利通はこれを抑え、江戸から義拳呼応を求める使者が来ると久光に決起を促し、久光がこれを容れぬと知ると、曲げてこれに従ったのであった。<sup>(5)</sup>

一方、水戸からの脱走者は予定より少かった。このため、「義拳」は、大老の襲撃のみに縮小された。同志は水戸脱藩一九人、薩摩脱藩二人で、襲撃は関鉄之介以下一八人が担当し、万延元（一八六〇）年三月三日に決行された。登城途中の大老は雪のため無防備で難なく討取られたが、他のメンバーが狙った諸藩への訴えは失敗した。先行上京した高橋多一郎も、襲撃成功を見届け上京した者も、すべて中途で捕えられたり自刃したりし、薩摩からの来援も来なかったのである。

しかし、白昼堂々と幕府の最高責任者が暗殺されたことは世間

に巨大な衝撃を与えた。水戸の家臣に倒幕という考えはなかったが、一般からは圧政に対する痛快な反撃として喝采され、さらに幕府の実力に対する軽蔑の念も生じた。人々がうすうす感じていた公儀の「御威光」の空虚さが実証されたのである。弾圧の下に屏息していた志士たちはにわかに活力を得、他の要人や西洋人襲撃を企て始めた。さらに、そこには、天皇の側近岩倉具視のように、王政復古を現実の課題と考える者たちも混じり始めた。もはや、安政五年以前、二百数十年の泰平に戻ることではできない。幕府の外に生きる人々は秩序崩壊を予感するようになった。どんな世の中になるか分らない。しかし、ともかく今まで通りの世は続かないだろうというのである。

#### 四、どんな悲劇だったのか

安政五年の政変は、幕府崩壊の起点となり、当事者の破滅、死とトラウマをもたらした点で、紛れもない悲劇であった。それだけではない。この事件は、勅許獲得の失敗から一橋党大名の処罰まで約四ヶ月たらず、堀田の上洛から間部の退京までも約一年の短期間に起きたことであった。ごく僅かの時間の中で予想外の事態が展開し、修復不可能な敵対関係を遺した。しかも、対立は

幕府と大名の間のみならず、幕府と朝廷、幕府と知識人の間にも生じ、それらが連鎖して、前代未聞の巨大な政変を呼び起こし、やがて体制破壊をもたらしたのである。

もしハリスが予定以前に神奈川沖に来なかつたら、どうだったろうか。大老は養嗣子問題を条約より先に解決できたはずであり、したがって一橋派を処罰することもなかつたであろう。むしろ、次に予定した京都への再上奏のため、あえて彼等を懐柔する手段に出たかも知れない。実際、後に一橋慶喜は將軍家茂の後見になつていたのである。条約問題で天皇が反対だったことは明かであるが、のちに長州の長井雅楽による航海遠略論にかなりの期待を寄せたことを考えると、妥協の余地がなかつたとは言えない<sup>(96)</sup>。まして、当時、大名のほとんどは開国を肯定するようになっていた。また、皇女の降嫁が安定した政治環境で実行されたならば、天皇の翻意にかなりの力を添えたことであろう。安政五年の政変が起きなければ、ある程度の難題が生じたとしても、政治体制自体が崩壊するまでには至らなかつた可能性が高い。

しかし、現実とは逆となつた。不信と憎悪、敵対行為の応酬という悪循環は拡大する一方となつた。どうして途中で止められなかつたのであろうか。一橋党の不時登城のあとの処分は関係者ほぼ全員を政界外に追放するもので、過酷の極みであった。対象を

絞り込むことはできなかったのだろうか。そうすれば、多くの大名から止むなしとの支持は得られたかも知れない。京都での宮・公卿の処罰もしかり、無関係だった松陰の江戸召喚もしかり、翌年の最終処分もしかりである。当時、攘夷論者や王政復古論者が台頭し始めていたのは確かであるが、彼等はまだ少数に過ぎなかった。紛争を局地化し、大名を初めとする世論の支持を確保していたならば、その勢力が急膨張することはなかったであろう。

なぜ、紛争の制御に失敗したのだろうか。一つ明白なのは、反一橋党の中で「水戸隠謀」という事実誤認が一人歩きした点である。九条閔白に持論の条約反対論を棚上げさせ、朝廷内唯一の幕府支持者に変えた決め手はこれであった。一旦、政治的有効性が認められたら、事実か否かを反省する余地はなくなる。七月に至ると「隠謀方」が実際に不時登城して大老を失脚させようと図った。疑いは確信に変わった。さらに九月に閔白が失脚寸前になったとき、これを防ぐにも、年末に天皇から条約の事実上の承認を取付けるにも、水戸陰謀論は有効であった。水戸の条約反対論は日本の将来を真面目に考えたものでない。自分の息子を將軍にしたなどの私的な野望に出た不当な主張である。これに同調するならば、朝廷も日本秩序の崩壊の共犯者になる。このような認識を提供することにより、水戸陰謀論は政局の核心的役割を負わされた。

これを認める限り、妥協は不可能になる。かつ、隠謀は不正に違いないから、その処罰も厳酷にならざるを得ない。

他方、一橋党の運動は執拗を極めた。六月に入って慶福の擁立が公然の秘密になってからも、彼等はその慶喜への差替えを企て、大老と老中松平忠固との不和につけ込んで、大老を失脚させようとの隠謀をしかけた。不時登城の後、將軍家定が危篤になったとき、大老が彼等の次の隠謀を恐れたのも無理はない。また、水戸の家臣のかなりは、斉昭らが逼塞した後も諦めず、主君に断りなく勝手に反対運動から討奸運動まで企てた。水戸ではかつて、斉昭の藩主擁立以来二度にわたって同様の運動が起きていたが、その首謀者であった会沢正志斎、さらに斉昭自身がこれを阻もうとしても、彼等は聞く耳を全く持たなかったのである。江戸時代に稀だった論争的かつ強情な家臣を持つ大名がたまたま將軍後継候補を擁していたという偶然が、もう一方の非妥協性を生み出していた。

一旦始った敵対関係は、暴力行使という薪をくべられて、さらに激しく燃上がっていった。一橋党の処分が第一段、王室書生の逮捕が第二段、公家の処分が第三段、最終的断獄が第四段。ここまでは幕府側の一方的暴力行使だったが、それは桜田門外という反撃に行きつき、その後はテロリズムの模倣が拡がっていった。

暴力は被害当事者とその近親者の間に根深い怨念を植付ける。かつての競争相手は不倶戴天の敵と変わり、報復と破壊への願望は日増しに募って、相手方が破滅するまで止むことがない。途中で相手方が宥和の姿勢を見せても、それはむしろ弱さと解釈されて、報復衝動はより高まる。暴力は一旦応酬が始ると停止は著しく困難となる。優勢な方は「暴力を止めるための暴力」と意味づけるが、それが功を奏するとは限らない。秩序回復の努力自体が紛争を拡大し、その中で、政治的妥協は絶望の域に至るのである。

このような悪循環を見ると、その場を支配しているのは「人」でなく、「運命」だと言いたくなる。正確に言えば、「場」に働く力、それによる「事」と「事」の連鎖が主人公のように見える。この渦に巻込まれたが最後、人は客体となり、押し流される。破滅するのも、生残るのも、本人の意志を超えた力のなせる業である。

## エピローグ

皆さま、お楽しみいただけでしょうか。最後の当り、作者がしゃしゃり出て、余計な理屈を述べてしまいました。興を削がれたとご立腹、なかには席をお立ちの方もいらつしたようです。

いやはや無粋なことです。

ただ、もう暫くご勘弁を。と言いますのは、最初にお芝居の悲劇を紹介して、悲劇とは何ぞやと問いましたが、はたして、現実に起きた歴史的事件をお芝居の悲劇仕立てで解釈して良いものでしょうか。

答を先に申しますと、イエス・アンド・ノウです。どちらも、ことは意外な形で展開し、最後は主人公たちの破滅で終ります。見ている者が強い感銘を受けるのも同じです。この共通点がある限り、比べてみるのは意味があります。

しかし、違いもあります。お芝居の悲劇は所詮、作り物です。見物人は舞台にどんな争いが展開しようと、まさか役者が実際に死んでしまうことはない信じ、安心して見ています。その上で主人公たちに感情移入し、ハラハラ・ドキドキ、手に汗を握り、目に涙を浮べ、ハッと我に返ってこれはお芝居なんだからと自らに言い聞かせます。

しかし、現実の悲劇は、生身の人間が殺されたり、苦境にあえぎます。これはよほど変った人でない限り、楽しめるものではありません。また、見ている人間も、下手をすると舞台の上に乗せられてしまうかも知れない。役者と観客の境目は流動的で、興を覚え、勇を鼓して飛込む人もいれば、用心深く日和見を決め込む

人も出てきます。無論、歴史の中で後者が多数派なのはご存じの通りです。

また、最後の破滅ですが、お芝居の場合は、たいていカタルシスが起きます。目の前に恐ろしい成行きを見、主人公の不運に涙しても、幕が降りた直後には、心が一種、洗われたような気分になる。日常のもやもやが消え去って、リセットされたような感じます。

しかし、現実の悲劇では、決してカタルシスは起きない。リセットされるどころか、事件は苦い記憶として沈殿します。あまりにきつい体験の場合、当事者の記憶は無意識下に抑圧され、忘れたかのように見えますが、それでも誰かが訪ねてきて聞き質すと、一気に思い出すと言ったことが時に起きます。悔恨と怨念と反省とが心の底に沈殿し、それらが和らぐのは、別に新たな事件が起きてその対応に追われたとしても、長い長い年月が立った後のことです。

現実の悲劇はある時点で終ることはありません。次の問題が踵を接してやってきます。しかし、区切れ目は確かにあります。そして、破局は新たな可能性もたらします。それまでは考えられなかったような「場」が生れるのです。安政五年で言えば、それまでは不可能だった「公論」が可能となった。タブーが破れて、

政府外の人間でも天下にも申すことができるようになりました。政府を批判することすら可能になりました。言わば、破局は「公論」の空間のビッグ・バンをもたらしたのです。そして、その大爆発の中で、それまでは少数の夢想に過ぎなかった「王政復古」というアイデアがあちこちに飛散り、むくむくと頭をもたげるようになりました。徳川に代る政府ができたのはずつと後、一〇年後のことでしたが、その種となった「王政」と「公議」というアイデアは、この政変の中に姿を現したのでした。

いかがでしょう。意識的にフィクションの組立てと歴史を重ね合せてみると、現実について色々な角度から考え直すことができます。皆さまがもしこの思考のエクササイズをお楽しみいただけますしたら、我々一座の者、望外の幸せです。これに懲りずに、またご観覧にお出でください。では、お氣をつけてお帰りを。ご機嫌よう。

註

- (1) ジョセフ・ナイ『国際紛争 理論と歴史』有斐閣、二〇〇二年。
- (2) 哲学者の論考に次があるが、いま参照する時間がない。ポール・リクール『時間と物語』全三巻、新曜社、二〇〇四年。
- (3) 以下、次を参照した。福田恒存訳『シェイクスピア I』新潮社、一九六八年。

- (4) 三谷博『ペリー来航』新版、吉川弘文館、二〇一五年。
- (5) 中根雪江編『昨夢紀事』全四冊、日本史籍協会叢書、一九二〇年（覆刻、東京大学出版会、一九八九年）。中根雪江『奉答紀事 春嶽松平慶永実記』東京大学出版会、一九八〇年。
- (6) 当時の徳川家内部の諸事情と血縁観については、久住真也『幕末の將軍』講談社、二〇〇九年。
- (7) 『西郷隆盛全集』一、大和出版、一〇一頁以下。
- (8) 島津斉彬あて家定夫人付老女幾島書翰、『大日本古文書 井伊家史料六』、東京大学出版会、九七頁。
- (9) 『堀田正睦外交文書』千葉県史料近世編、千葉県、一九八一年、三三、五〇—五二頁。
- (10) 日本史籍協会編『橋本景岳全集』二、一九三九年、六五〇頁以下。
- (11) 『大日本古文書 井伊家史料五』、一七九号以下。
- (12) 宮内庁蔵版『孝明天皇記』第二、吉川弘文館、一九八七年、七七八頁。
- (13) 豊田小太郎「水戸内奏書」、『水戸藩史料』上編・坤、吉川弘文館、一九一五年、二九頁。
- (14) 宇津木六之丞あて長井義言書翰（安政五年二月一日）『大日本古文書 井伊家史料五』一八七号。九條閑白、井伊直弼、および將軍の御側御用取次夏目信明の反応については、同二〇二号（宇都木あて長野書翰）、二〇三号（長野あて井伊直弼書翰）を参照。
- (15) 鷹司政通あて徳川斉昭書翰案、『昨夢紀事』二、四一六頁。
- (16) 『昨夢紀事』二、四一頁。
- (17) 『大日本古文書 井伊家史料五』二〇二号。
- (18) 吉田常吉『井伊直弼』吉川弘文館、一九六三年、二四〇頁。
- (19) 宇津木六之丞『公用方秘録』（安政五年四月二日）
- (20) 『昨夢紀事』四、七一—一頁。
- (21) 母利美和『井伊直弼』吉川弘文館、二〇〇六年、一九八—二〇四頁。木俣家本『公用方秘録』による。
- (22) 『昨夢紀事』四、一七九—一八二、一九〇—一九五、二二三—二三八、二四三、二五〇頁。
- (23) 『昨夢紀事』四、二五八—二七一頁。
- (24) 吉田常吉『安政の大獄』吉川弘文館、一九九一年、二〇三頁。
- (25) この間の事情は、宇和島伊達文化保存会監修、藤田正編集・校注『伊達宗城隠居関係史料』創泉堂出版、二〇一四年。
- (26) 以下、水戸関係はすべて、『水戸藩史料』による。
- (27) 吉田常吉『安政の大獄』二一七頁以下。
- (28) 『孝明天皇記』第三、三〇頁。
- (29) 吉田常吉『安政の大獄』一三四頁。以下、事実関係は同書による。
- (30) 間部詮勝上書（安政五年一〇月二四日、一月一日、二月一日、二月一八日）、『孝明天皇記』第三、一〇八、一一三、一四〇、一四五、一四七頁。
- (31) 『孝明天皇記』第三、一五五頁。高橋秀直『幕末維新の政治と天皇』吉川弘文館、二〇〇七年、総説。
- (32) 吉田常吉『安政の大獄』二七三頁以下。
- (33) 以下、『水戸藩史料』による。
- (34) 『水戸藩史料』上編、坤、七六三—七七八頁。
- (35) 勝田孫弥『大久保利通伝』上巻、一九〇〇年（復刻臨川書店、一九七〇年）、一一三頁以下。芳即正『島津久光と明治維新』新人物往来社、二〇〇二年、四七頁以下。
- (36) 高橋秀直『幕末維新の政治と天皇』総説。